発達理論の学び舎

Back Number: Vol 186

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

3701. 再レビューの開始

3702. コインとなった友人を隠す夢

3703. 急な山道を下る夢

3704. 一万時間の法則と三年の周期

3705. 清らかな日曜日の朝に

3706. 教会旋法について

3707. 蔓延する発達的浄化思想

3708. この三年間の密かな悩み

3709. 北海道の自宅に関する夢

3710. 水と色、ヨーロッパのある国に関する夢

3711. イギリス人の大学生と話す夢

3712. 課題創出のための実践：芸術鑑賞の観点

3713. 芸術作品としてのオーダースーツ

3714. 4台の車が炎上する夢：友人を更生させる夢

3715. 近づく書籍の出版日：ある女性歌手と話をする夢

3716. ジャズ音楽への関心と今朝方の最後の夢

3717. さざ波のような粉雪舞う中で

3718. 小さな積み重ね・小さな発達

3719. 白銀世界の朝に見た夢

3720. 夢の追記：日本語空間と英語空間

© YOHEI KATO 2019

3701. 再レビューの開始

土曜日の朝がやってきた。今朝は六時に起床し、六時半を過ぎた頃に一日の活動を始めた。

ここ最近は、夜の九時半を過ぎたあたりから就寝に向けた準備をし始め、早く寝るように心がけている。九時半を超えてから、集中力が低下した状態で本を読んだりするのではなく、もうその時間帯になったらいっそのこと、明日に備えて寝てしまった方が良いと思うようになっている。良質な睡眠を取ることができたおかげで、今朝の心身の状態はとても良い。今日もまた、探究活動と創造活動に存分に打ち込めるような気がしている。

今日は再び、監訳の仕事に取り掛かろうと思う。10日ほど前に、翻訳のレビューが完了し、「はじめに」と巻末の解説を一週間ほど前に書き上げていた。しばらく文章を寝かせたこともあるので、今日から二度目のレビューを行っていく。全七章と注記のうち、今日は本文の半分程度、つまり三章までか、四章までレビューを行いたい。

最初のレビューの時には、原書と突き合わせてレビューを行っていたが、二度目のレビューではそれは必要ないだろう。今回は、翻訳文だけを再度読み返し、一回目のレビューの時に抜け漏れていた事柄はないかを確認していく。また、一回目のレビューの際に自分が付したコメントに対しても、改めてそれが妥当なものかを確認していく。すでに本文全体を読んでいることもあり、二回目のレビューではまた新しいことに気づくかもしれない。今日のメインの仕事は、監訳書のレビューとし、午前と午後を使って、ゆっくりと進めていきたい。

昨日、ふとしたきっかけで、バルトークの楽譜に手が伸びた。これまでは、『ミクロコスモス』の楽譜を参考にして作曲をすることが時折あったが、その他に持っている二冊の楽譜は、まだ一度も参考にしたことがない。そうしたこともあり、改めてバルトークのピアノ曲はどのような特徴を持っているのかが気になり、二冊の楽譜を手に取った。書斎のソファに積み上げられている楽譜の山から、二冊の楽譜を取り出し、椅子に腰掛けてしばらく中身を眺めていた。

すると、『ミクロコスモス』のみならず、これら二冊の楽譜からも大いに学びが得られそうだと直感的に思った。ただし、よくよく楽譜を眺めると、それらは二巻シリーズのものなのだが、第一巻よりも、第二巻から参考にした方が良いと判断された。というのも、第二巻の方が、より短く、構造的にシンプ

ルな曲を多数掲載していたからである。感覚的には、『ミクロコスモス』の続編にあたるような印象をもたらす作品群が第二巻に収められている。まずは、『ミクロコスモス』に掲載されている曲をすべて参考にしたいと思うが、第二巻の曲も近々参考にしたいと思う。フローニンゲン：2019/1/19（土）07:00

No.1588: A Gentle Cradle

The hours at night today look like the time that a gentle cradle creates. Groningen, 21:41, Saturday, 1/19/2019

3702. コインとなった友人を隠す夢

どうやら今日も、最低気温はマイナスになるようだ。昨日、行きつけのチーズ屋の店主が述べていた通り、これから本格的に寒くなってくる。一方で、晴れの日が増えてくることや、日照時間が長くなることは喜ばしい。今この瞬間は、まだ辺りは闇に包まれているが、今日もまた僅かばかりではあるが、日の出の時間が早くなっているだろうと予想する。そして、今日もまた晴れであるということが、なんとも言えない喜びを私にもたらしてくれる。

今日から火曜日までは晴れの日が続き、火曜日は雪が降るようである。ちょうどこの日に散髪の予約をしており、天気予報を見たときは、雪の中を街の中心部に行くのは面倒かもしれない、と一瞬思ったが、それもまた一興であろうと思った。かかりつけの美容師であるメルヴィンの人気は高いため、直前に予約をしようと思ってもそれは無理である。おそらく、今週の彼の予約はすでに一杯であろうから、他の曜日に変更することは難しいだろう。また、ちょうどメルヴィンは、月曜日までスイスでウィンタースポーツを楽しんでいるそうなので、その話を興奮覚めやまぬ段階で聞くためには、やはり火曜日が良いだろう。火曜日に本当に雪が降っていれば、その景色を堪能しながら、雪の中をゆっくり歩いてメルヴィンの店に向かいたい。

今日の仕事に取り掛かる前に、今朝方見た夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、古びた学校の校舎にいた。辺りを見渡すと、生徒はほとんどおらず、私の横には二人の友人がいた。私は、一人の友人とは和気藹々と話をしていたのだが、もう一人の友人（KS）とはほとんど話をしていなかった。というのも、彼は何か怒っているようであり、苛立っていることがわかったからだ。どうもそ

の怒りの矛先は、私たちに向かっているわけではなく、他の生徒、ないしは学校そのものに向かっているようだった。

私たちは靴箱の方に向かい、下校しようとしていた。すると、先ほどから怒っている様子であった友人が、突然暴れ出した。先ほどまではほとんど生徒がいなかったのだが、見ると、他の生徒も下校のために靴箱の周りに集まっており、突然暴れ出した友人に対して、みんな困った表情を浮かべていた。幸いにも、その友人がひときわ小さかったこともあり、暴れたとしても私たちには対して危害はなかった。

とはいえ、彼が暴れ出したことは周りに迷惑であることには変わりなかったため、何か手を打つ必要があると私は考えた。最初、もう一人の友人と私がおとりになって、暴れ出した友人の注意をこちらに引きつけようとしてみた。これは比較的うまくいき、彼が私たちの方に向かってきた。だが、彼にはもはや理性はなく、他の人が目につくたびに、そちらに向かっていき、乱暴しようとする。そこで私は、不思議な力を使って、彼を一枚のコインに変えてしまった。それはお金ほどに小さなものではなく、どら焼きぐらいの大きさのコインである。コインになった友人は、なおもコインの姿のまま暴れており、私はそのコインを地面にはたき落とした。

すると、コインの暴れは収まり、それは地面でピクピクと動いていた。私はそのコインを拾い上げ、学校近くの工事現場の瓦礫の山の中に隠した。ちょうど瓦礫の山の中に、コインが収まるような穴があり、そこにそれを隠したのである。もう一人の友人は、コインの上に石などをかぶせていき、コインが外に出てこないようにした。

友人と私は、この件は二人だけの秘密にしようと誓って、その場を離れた。その工事現場の近くには横断歩道があり、それを渡っている最中にも、友人をコインに変え、そのコインを工事現場に隠したことは内緒にしようと話し合っていた。その件で話はもちきりとなり、しばらく歩いていると、道の右手にカフェを見つけ、そこで少しゆっくりしていくのはどうかと私が持ちかけた。すると、友人も賛同してくれたが、「カフェではあの件については話をしないようにしよう」と述べ、私はそれに賛同してカフェの中に入っていった。フローニンゲン：2019/1/19（土）07:31

© YOHEI KATO 2019

No.1589: Snow on a Roof

I'm looking at snow on the roofs of redbrick houses. Groningen, 13:32, Sunday, 1/20/2019

3703. 急な山道を下る夢

今朝方の夢の続きを振り返っている。今朝方はもう一つ印象に残る夢を見ていた。

夢の中で私は、緑豊かな山道を自転車で走っていた。その山道は起伏が激しく、ちょうど私は山を登りきり、これから長い下り坂を下っていこうとしていた。すると、反対側の道を、私と同じ方向に下っていこうとする人がいることに気づいた。見ると、小中学校時代の友人の女性(YY)だった。

彼女はヘルメットをかぶり、これから勢い良く下り坂を下ろうとしていた。彼女も私の存在に気づいたようであり、遠くから私に声をかけてきた。「私の方が先に下るからね」と彼女は笑顔で述べた。その笑顔には幾分挑戦的な意味合いが含まれており、どうやら私たちは、どちらが先に山の麓まで下っていけるのかを競っているようだった。

彼女が下ろうとしている道は、整備が行き届いており、比較的安全である。適度なカーブがあることによって、その都度ブレーキを踏む必要があり、そうしたことをもその道を下っていくことの安全性を確保していた。一方、私が下ろうとしている道は、ところどころ整備が行き届いておらず、しかも前から車が勢い良くやってくる可能性もあり、危険である。さらには、カーブがほとんどないため、速度が出すぎてしまう恐れもあった。

そのようなことを考えていると、彼女はさっそく山道を下りだした。私も遅れまいとこちら側の道を下り始めた。案の定、彼女の道は安全であり、とても快適に道を下っていく姿を横目で見ていた。一方、私が下っている道は、最初こそお互いの道に差はあまりないように思えながらも、徐々に下る傾斜が急になり、自転車の速度はみるみる早くなっていた。

あるところまで来ると、私はブレーキを一切踏まずに一気にこの道を下っていこうと思った。すると、あまりにも速度が出すぎてしまい、相当な恐怖感に襲われた。しかも、もうそこからはブレーキを踏んだとしてもどうしようもないぐらいの速度になっており、逆にブレーキを踏むことによって体が前に

投げ飛ばされてしまうかもしれないと思えてきた。とにかく私は、前からやってくる車にぶつからないようにして、一気呵成に山道を下っていった。

幸いにも、私は事故を起こすことなく山道を下ることができた。彼女が後ろからやってくる様子は一切なく、私は山の麓で今度はゆっくりと自転車を運転することにした。見るとそこには、海が広がっており、長閑な港町の姿が見えた。なぜだか私は、ここが日本ではなく、どこかの国の小さな島なのだとわかった。

工事現場の道を少し下り、平坦な道に差し掛かったところで、オランダ人の作業員の方に私は話しかけた。というのも、もうしばらくしたらこの島を離れる必要があり、フェリー乗り場に行く必要があり、それがどこにあるのかを教えてもらおうと思ったからだ。

オランダ人の作業員の男性は、フェリー乗り場の場所を親切に教えてくれた。どうやら、今いる場所とは反対側にフェリー乗り場があるらしく、さらには、今下ってきた道とは違う山道を、今度は登る必要があることがわかった。教えてもらった山道をゆっくりと登っていると、途中で道に迷ってしまった。見ると、山の中腹にある美術館が目に入り、私はそこに立ち寄ることにした。

中に入ってみると、そこは美術作品を飾っているというよりも、どこか暗い忍者屋敷のようだった。私はそこでも迷ってしまい、ウロウロしていると、赤い紐が張られた入ってはならない場所に入ろうとすると、係りの人から注意されてしまった。引き続きこの忍者屋敷のような場所をウロウロしていると、突然明るい場所に出た。見ると、そこにはカフェがあり、私はそこで昼食を摂ろうと思った。

出店のようなカフェには、二人の若い女性の店員がいて、そのうちの一方の人に注文をお願いしようと思った。すると、店の前に並べられていたお菓子の山の中に、一つの携帯電話が刺さっていることに気づいた。きっとそれは誰かの忘れ物だろうと思い、それを抜き取って店員に渡そうと思った瞬間に、「その携帯に触らないでください。今充電中なんです」と言われた。それは客の忘れ物ではなく、客の誰か、あるいはその店員が携帯を充電するために、お菓子の山にそれを突き刺しているようだった。

私は気を取り直して、昼食のメニューを選び、注文しようとした。いざ注文しようと思った私の左横に、小中学時代の友人が笑顔で立っていた。彼に話しかけると、彼もそこでメニューを頼み、今から昼

© YOHEI KATO 2019

食を食べるようだった。彼が何を頼んだのか気になっていたところ、次から次へと皿が出された。美味しそうなご飯ものが合計で四品出てきた。それら一品一品は、一人前のような分量があり、四人、ないしは三人の男性とシェアをするのかと思っていたら、どうやら彼はそれを全て一人で食べるようだった。

私はそれに驚いたが、四品の中でも、特に特製カレーとあん掛けの五目ご飯が美味しそうだと思った。迷った挙句、私は、後者の五目ご飯を注文しようとしたのだが、なぜだか注文で使う日本語に自信がなかったため、彼に注文をお願いした。注文を待っている間に、彼と雑談をしていたところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/19(土)08:08

No.1590: A Walk under a Wintry Sky

Today's temperature has been constantly under zero. Tomorrow will be the same, but the weather seems to be fine, which makes me joyful. Groningen, 17:50, Sunday, 1/20/2019

3704. 一万時間の法則と三年の周期

時刻は午後八時を過ぎた。土曜日が静かに終わりに向かっている。

それにしても、今日は本当に良い天気であった。夕方に、西の空に沈む美しい夕日に思わず見入っていた。その時には、空に一切の雲がなく、空の色が幾層にも分かれており、エメラルド色もあれば、鮮やかなオレンジ色もあった。幸いにも、明日は今日よりもさらに天気が良いようであるから、朝日と夕日の美しさをゆっくりと堪能したいと思う。

本日は、午前と午後に分けて、ウィルバーの書籍の監訳の仕事に従事していた。今日から二度目のレビューを始めた。前回全文をレビューしてから二週間程度時間を空けたおかげもあり、今回改めてレビュをしてみて、色々と見落としていた事柄に気づくことができた。そうした箇所を中心に修正を行ったり、コメントを挿入したりしていった。

一応計画通り、今日は全七章のうちの三章までレビューを終えた。第三章の分量が多かったことを考えると、明日は今日と同じだけ時間をかけたとしても、残りの四つの章を全てレビューすることができるだろう。特に、最後の章は極めて短いので、明日の段階で本文を再度レビューし終えること

は現実的だ。明後日には、注記に対してレビューを行う。注記はかなりの分量があるが、できれば一日でレビューを終わらせたいと思う。そこでレビューは完了となり、あとは火曜日に、自分が執筆した「はじめに」と解説文を読み返し、火曜日の夜か水曜日の昼に、原稿を編集者の方に送りたいと思う。予定よりも少しばかり早めに原稿を送ることができそうだ。

書籍のレビュー以外にも、今日もまた、過去の日記を編集していた。日記を編集していた気が付いたが、この三年の間に3,600を超す日記を書き留めている様子を見ると、やはり10年分の事柄を三年弱で積み重ねているように思えてきた。

巷ではよく、一万時間の法則を実現させるためには、10年ほどの時間がかかると言われているが、もしかするとそれは、三年ほど集中的に実践に取り組むことで実現可能なのではないかと思えてくる。少なくとも私の実感としては、この七年間の欧米生活においては、一万時間の法則を二回ほど自らに課したような感覚がある。

もちろん、最初の四年間の生活においては、毎日日本語でその日を振り返ることをほとんど行っていなかったことを考えると、積み重なったものはこの三年に比べると劣るのかもしれないが、毎日の探究時間や実践時間は、この七年間においてはほぼ一定である。興味深いことに、三年ほど集中的に実践に取り組んでいると、まさにそれが一万時間の法則を実現したからなのか、突然に新しい探究領域や実践領域が目の前に現れ、今度はその領域の探究や実践に乗り出す自分がいる。そうしたことが、およそ三年に一回の周期で起こっている。

ここからの三年間もまた、現在のような探究量と実践量を必然的に自らに課していくと思う。三年後、今度はどのような新たな領域が目の前に立ち現れるのか、幾分楽しみにしている自分がいる。フローニンゲン：2019/1/19（土）20:33

3705. 清らかな日曜日の朝に

時刻は午前九時半を迎えた。日曜日の静かな朝が目の前に広がっている。この時間帯になると、辺りはすっかり明るくなっており、今日は青空が広がっている。ライトブルーの冬の空を眺めることができるのは、とても久しぶりのように思える。

赤レンガの家々の屋根を見てみると、雪がうっすらと積もっている。昨夜未明に雪が降ったようだ。起床した時の気温はマイナス6度であり、外の気温は極めて低かった。起床したのは午前六時過ぎだったのだが、なんと今もまだマイナス6度の気温が維持されている。昼の一時にマイナス1度となり、昼の三時に気温が2度まで上がるとのことであるが、そこから再びマイナスの世界に入るようだ。明日からも、最低気温は軒並みマイナスとなる。いよいよフローニンゲンらしい冬がやってきた。

昨夜、ウェブサイトのプログラムがアップデートされたようであり、今朝方自分のウェブサイトを確認してみたところ、アップデートによって、レイアウトが色々とおかしくなっていることに気づいた。そのため、それらを修正することを行っていると、気がつけば二時間ほどの時間が経っていた。いつもであれば、日記の執筆をする時間を、ウェブサイトの修正に充てていたため、今このようにして日記を書き留めている。

起床してから随分と時間が経ってしまっているため、今朝方の夢の記憶が薄れてしまっている。とりあえず、覚えている範囲のことを書き留めておきたい。

夢の中で私は、一階建ての建物の一室にいた。そこは大きなセミナールームのようであり、中にはたくさんの人がいた。見ると、その中には私の友人が何人かいた。彼らに話しかけてみると、何やら今から、持参したロボットのお披露目会があるとのことであった。私は特にロボットを持参したわけではなかったのだが、気がつくと、私の手には小さな円盤状のロボットがあった。

セミナールームの椅子と机を脇にどけ、会に参加していた人たちが、思い思いに自分のロボットを操縦し始めた。他の人たちが持参したロボットを見てみると、どれもみな小型である。そして、人型のロボットはほとんどなく、私と同じように、小型の円盤状のロボットを持参している人が多かった。

しばらく自分のロボットを動かすことに興じていると、この会を仕切る人物がマイクを使って案内を始めた。その方は見覚えがあるのだが、その方の名前を思い出すことができなかった。司会のその方が案内として、「今から部屋の周りを反時計回りにロボットを動かしていきましょう」と述べた。すると、その場にいた全員がその指示通りに、部屋の周りを反時計回りにロボットを動かし始めた。私もその流れに乗ってロボットを動かしていると、私の友人が声をかけてきた。どうやら、私たちのロボットは合体ができるらしく、それをすると、さらに早く動かすことができるらしかった。そのためには、私のロ

ボットの蓋を開け、その中にあるラーメンの素にお湯を注ぐ必要があるらしかった。私は自分のロボットの蓋が開くことを知らなかったし、蓋の中にラーメンの素が入っていることも知らなかった。私は蓋を開け、「ちょっと待ってて。今お湯を取ってくる」と友人に述べた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2019/1/20（日）09:43

No.1591: An Icy Gatekeeper

I feel like as if an icy gatekeeper were standing with commanding eyes on a cold night. Groningen, 21:43, Sunday, 1/20/2019

3706. 教会旋法について

時刻は午前11時を回った。今は薄い白い雲が空を覆っているが、それは太陽を全て隠してしまうほどのものではなく、相変わらず、太陽の優しい光が地上に降り注いでいる。

今日は早朝に、ウェブサイトの修正をすることに二時間ほどの時間を充てており、普段午前中に行う活動が後回しになってしまった。作曲実践はまさにその一つであり、今から昼食までの時間を使って、一曲ほど曲を作りたいと思う。

先ほどまで、ウィルバーの書籍の監訳の仕事を進めていた。今日はできることならば、本文の残りの章を全てレビューしたいと思う。ちょうど第四章のレビューを先ほど終え、午後からは第五章のレビューに取り掛かる。もちろん、レビューの期限までまだ時間があるので、焦ってそれを済ませる必要はないのだが、自分の気持ちとしては、今日中に本文のレビューを終えておきたいという思いがある。

昨夜、バルトークの『ミクロコスモス』を参考にして、教会旋法を活用してみることにした。これまで音楽理論を学習する中で、教会旋法に関する説明を目にすることがよくあり、前々から実際にそれらを活用してみたいと思っていたのだが、どのように活用すればいいのかのイメージがあまり沸いていなかった。意を決して、昨夜、教会旋法の一つを活用して作曲実践を行ってみた。やはり、どのようなタイミングでいかに教会旋法を活用すれば良いのかがあまり明確ではなく、なんとなく教会旋法を意識しただけの作曲実践となった。

そこから一夜が明け、手元には教会旋法に関する専門書が一冊もないので、参考になる書籍はないかと少し調べてみた。すると、“Chorale Harmonization In The Church Modes (2018)”と“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”という二冊を発見し、それらはどうも自分の課題意識に対してヒントを与えくれそうだと思い、イギリスの書店を通じて二冊を注文した。

教会旋法に習熟することができれば、調性のある曲に対しては、より多様な響きをもたらすことができるだろう。そうしたことを期待して、二冊の書籍に加えて、インターネット上の情報を含めて、教会旋法を活用した作曲について調べてみようと思う。早速午後からは、再度バルトークの曲に範を求めながら、教会旋法のうちのどれか一つ、ないしは複数の旋法を活用してみようと思う。フローニンゲン:2019/1/20(日)11:43

No.1592: A Withered Tree

It is severely cold today, but withered trees are standing in a dignified manner. Groningen, 09:28, Monday, 1/21/2019

3707. 蔓延する発達的浄化思想

時刻は午後四時半を迎えた。何んとも言えない淡い夕暮れ時の空が広がっている。

数羽のカモメが追いかけっこをしながら戯れている。

現在の気温は0度であり、これからマイナスの世界に向かっていく。それにしても、日照時間が伸びたことは、何とも言えない喜びをもたらしてくれる。四時半のこの時間帯に、夕日の姿をこのように眺めることができているのはいつぶりのことだろうか。この調子だと、午後五時までは、ほのかな明るさを残しているように思う。

赤レンガの家々の屋根に積もっている雪は、まだ溶けずに残っている。今夜もまたマイナスの世界に突入するため、深夜に雪でも降れば、屋根の雪が増すかもしれない。

午前中と午後にかけて、監訳の仕事が随分とはかどった。幸いにも、分量的に多い章を全て読み終え、残りは分量的に最も短い最終章だけとなった。最後の章は、夕食前にレビューをしておきた

い。それをもって本文のレビューは完了し、明日は注記のレビューに集中することができる。午後に本文のレビューをしている最中に、改めて、高度な発達段階を体現した個人を単純に組織内に増やそうとする試みには注意しなければならないと思った。端的には、それは「負の発達的浄化」を行おうとしているに過ぎない。

仮に、組織の構成員を全てティールの発達段階にしようとしても、それは根本的に無理な話である。組織というのはある意味、様々な発達段階の人間がいることによって機能していく側面があるからである。例えば、シリコンバレーの革新的な組織に所属する全ての人たちが高度な段階にいるかというと、全くもってそうではないだろう。非常に極小の組織（例えば構成員二人）であれば、確かに、高度な発達段階に到達した人間だけで組織運営ができるのかもしれないが、一般的な組織においては、それは現実的ではなく、日本の大企業のような組織になれば、なおさら不可能なことである。

それにもかかわらず、組織が構成員に対して高次元の段階であることを要求するというのは、何か方向性が間違っているように思えてくる。そもそも、発達の原理として、私たちは次の発達段階を飛ばすことはできないのだ。そして、ティールというのは極めて高度な段階であり――さらにはターコイズやインディゴなどの発達段階もあるが――、そうした段階に到達することを、組織の多くを占めるであろうブルーやオレンジの段階に強要するのは無理な話である。

ティールであることを強要するというのは、そもそもティールの段階がなすような行動ではなく、それはオレンジのそれか、下手をするとレッドのそれだろう。発達段階を飛ばすようなことを強要する態度や行動は、様々な段階を周縁に追いやってしまう。組織内でティールであることを強要された場合、ブルーやオレンジの人々はどこに行けばいいのだろうか？ウィルバーの指摘するように、発達の螺旋を健全なものにしていくことが、発達理論の活用における最重要な態度であるならば、組織として行うべきことは、むやみやたらに高度な段階に到達することを構成員に強要することではなく、彼らが健全な発達を着実に遂げることができるような居場所と支援を提供することにあるのではないだろうか。フローニンゲン：2019/1/20（日）16:49

No.1593: The Gracious Twilight

I’m remembering yesterday’s gracious twilight right now. It was exquisite. Groningen, 17:41, Monday, 1/21/2019

3708. この三年間の密かな悩み

私は日常、全くと言っていいほど悩みはないのだが、実はこの三年間悩んでいることが一つある。

四年前に米国から一度日本に戻ってきた時、一年ほど東京で生活をしていた。東京で生活をし始めたある日、「そういえば、企業人を辞めてからスーツを新しく購入することはなかったな」ということをふと思った。

米国で暮らしていた時も、日本企業との協働プロジェクトがあったのだが、その時はもちろん、物理的にクライアント先に行くことはなく、スーツなど着る必要がなかった。しかし日本に帰ってきてから、クライアント先や企業で講演をすることなどが増えてきたため、「オーダーメイドのスーツでも購入しよう」と、ある日思った。

前職時代に来ていたスーツは全て既製品だったのが、どうせ新しくスーツを購入するなら、これからは全てオーダーメイドにしようと考えていたのである。東京のあるオーダースーツ専門店に行き、そこで色々とスーツについて話を伺ってみると、スーツの世界が実に奥深いものであることがわかり、そこからはかなりスーツについて調べた。

様々なブランドの生地を試してみようと思い、最初は三着ほどオーダースーツを作ってみた。店で体の大きさを測ってもらっている時から感じていたが、自分の身体にフィットしたスーツというのは、心の有り様を随分と変えてくれるのだと感心した。そこから私は、その一年でもう二回ほど同じ店に通い、気がつけば合計で10着ほどのオーダースーツを作っていた。どのオーダースーツもそれぞれ、生地やボタンなどのちょっとした箇所に愛着があり、スーツが出来上がってからは、それを着ることが一つの小さな楽しみであった。

東京にいた一年間も、私は基本的に外に出ることは多くなく、近所のスーパーや、ランニングとして近所の公園や神社に行くだけであり、企業に足を運ぶことも二、三週間に一回ぐらいの回数であった。そうしたこともあり、作ったオーダースーツをそれぞれ数回程度しか着ておらず、中にはまだ一度も外で来たこともないものも一着ほどある。そうこうしている間に、私は日本を離れ、オランダで生活を始めた。オランダでの三年間において、スーツを着る機会など皆無であり、覚えている限りで言

えば、二年前の大学院の卒業式の時に一度だけ、ロロ・ピアーナのオーダースーツを着たことを覚えている。

そう、この三年間抱えていた悩みとは、せっかく作った10着のオーダースーツを全く着る機会がないことなのだ。

私は普段から算術癖があり、例えばオーダースーツを着る時には、購入価格とこれまで来た累積回数から、その日一回あたりのスーツ使用料を必ず計算してしまう。10着のスーツはそれぞれ、イタリアとイギリスを代表するメーカーのものであるから、1着の値段は結構なものである。そうしたことを考えると、これまでの一回あたりのスーツ使用料は極めて高い。

今から数ヶ月前に、普段着として愛用していたパンツを洗濯した後にアイロンをかけた時、間違って高温の設定にしてしまい、デリケートな生地が熱で溶けてしまった。それは本当に愛用してたパンツであったから、なんとか修理できないものかと思い、フローニンゲンの街のクリーニング屋兼修理屋に持って行ったところ、「これはもう無理ですね」と言われてしまった。

そうしたこともあり、普段着として着れるパンツが一着減ってしまったことも悩みであった。また、その代わりとして新しいパンツをフローニンゲンのアパレルショップで購入しようとしたところ、最も小さいサイズでも大きすぎであり、店員の気さくな男性が、「私はオランダ人でもかなり小さい方で、178cmぐらいしか身長がなく（日本人男性に置き換えると、165cmか166cmぐらいのイメージ）、店で売られているものがほとんど合わないんです。だから普段着もオーダーメイドのものが多いです。お客さんも、オーダーメイドか、あるいは子供用のものを購入することをお勧めします」とご丁寧に述べてくれた。

結局私は何も購入しないまま──サイズの都合上、何も購入できないまま──、その店を後にしたのを覚えている。そこでふと、「そういえば、スーツを普段着として着るというのはどうなのだろうか？」と思ったのである。実はこのアイデア自体は、オランダに来てから何回か芽生えていた。というのも、せっかく作った10着のスーツがクローゼットの中で眠っているのが少し可哀想に思えることがあったからだ。そこで調べてみると、結論としては、スーツを普段着として着ることは悪くないことがわかっ

た。ただしいくつか条件があるようであり、インナーや靴などをカジュアルなものにすれば良いということがわかったのである。これは私にとってとても朗報であった。

色々と調べてみると、「スーツを着崩す」という概念が存在するらしく、それはインナーや靴などをカジュアルなものにすることによって実現されるらしい。また、私はリュックサックを背負うことも多いので、それは「外す」という概念に該当し、スーツを着崩すという条件の一つであるようだ。

次回街中に外出するのは、火曜日であり、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行く。この日に雪が激しく降っていなければ、早速、「スーツを着崩す」という実験をしてみたい。

今の私は、メルヴィンの店に行く以外に外出をする機会はほとんどなく、近所のスーパーと行きつけのチーズ屋に行く時にはさすがにスポーツウェアで十分だと思う。そうなってくると、スーツを着崩す場面は少ないが、今後の生活地において、あるいは日本に一時帰国する際などは、スーツを着崩す形で外界に出て行こうと思う。この三年間抱えていた小さな悩みが解消されたことは喜ばしく、ようやく役目を果たせる10着のスーツたちも喜んでくれるだろう。フローニンゲン：2019/1/20（日）20:48

3709. 北海道の自宅に関する夢

今朝は六時半過ぎに起床し、七時を少し過ぎたあたりに一日の活動を始めた。予想していた通り、早朝に起床してみると、目の前の通りに停まっている車の上にうっすらと雪が積もっていた。昨夜は決して雪が激しく降ったわけではないと思うが、いかんせん気温が低くかった。ちなみに今の気温はマイナス4度である。

今日の計画について書き留める前に、今朝方見た夢について書き残しておこうと思う。数日前に述べたように、夢はチャンスや気づきと同様に、やってきてすぐにそれを捕まえておかないと、すぐに逃げてしまうという特性を持っている。これからは、一日の活動計画について日記を書き留めるよりも先に、まず夢について振り返りの日記を書こうと思う。早朝にパソコンを立ち上げた際に、すぐに夢の概要を書き留めておき、歯磨きや朝の習慣的な実践を終え、お茶を入れてから夢を振り返ることを徹底させていこうと思う。

夢の中で私は、小中高時代の友人数名と一緒に、北海道の片田舎の町に列車で向かっていた。列車の窓から見える景色はとてものどかであり、景色を見ているだけでも気分が落ち着いた。どうやら私たちは、北海道にそれぞれ家を持っているようだった。ちょうど列車がある駅を通過した時、私の家が見えてきた。それは一軒家であり、北海道の土地が広いためか、かなりの豪邸だった。しかし、それはまだ建築中であり、見ると、まだ建物の骨組みだけが出来上がっていたに過ぎなかった。

私:「あっ、自分の家が見えてきた！あれだよ」

友人(NK):「おぉ、かなり大きな家だね～」

その他の友人たちも、一様に私の家の大きさを驚いている。私たちは窓から家の外観を眺めていた。すると、私はハッとした。なぜなら、今通過した駅で降りなければならなかったからだ。

私:「しまったなぁ。さっきの駅で降りなきゃいけなかったんだけど」

友人(YK):「自分もそうだよ。次の駅ですぐに降りて、歩いて引き返そう」

友人の一人(YK)も、一つ前の駅で降りなければならなかったらしい。次の駅に到着すると、私はその他の友人に別れを告げ、駅の構内に向かった。

駅から歩いて自宅に行くとすると、意外と時間がかかることがわかり、また、タクシーもあまり走っていないようだった。加えて、この地域の列車の本数は少なく、次の列車は一時間以上待たなければやってきそうになかった。そのため、友人と私はバスを使うことにした。

バスの切符を購入する機械を見つけ、そこに向かってみると、随分と長い列ができていた。しかし幸いにも、意外と早く私たちの順番が回ってきた。私はいくらのバスの切符を購入すればいいのかわからず、ここから自宅までの距離を考えると、一番安いのでも問題ないだろと思い、100円を入れ、60円の切符を購入した。友人は同じ場所に向かうはずだったのに、780円ほどの切符を購入した。聞くところによると、列車の駅としては私の自宅のある駅で降りればいいのだが、そこから歩いてかなり

の距離の場所に彼の家があるらしかった。バスに乗れば、自宅のすぐ近くまで行けるとのことであり、そのために高い切符を購入したのだと彼は説明した。「それにしても高い切符だな」と私は思った。

切符を無事に購入したため、今度はバス停を探そうとした。近くで立ち話をしていた二人の中年女性に声をかけ、バス停の場所を聞いた。すると、その方たちも厳密なバス停の位置はわからないようであり、バス停がありそうな方向だけを教えてくれた。そこで私の友人は、もう少し二人の中年女性に質問をしようとしていたのだが、私はバスの時間が迫っていると思い、先に行くと述べて、一人でバス停に向かった。

駅の階段を下り、薄暗いトンネルのような場所の先にバス停があるのが見えた。どうやらバスはもうやってきており、オレンジ色のヘッドライトが見えた。私は走ってバスに向かったが、もう間に合わないと思い、瞬間移動をしてバスの中に移動した。そこで夢の場面が変わり、私は自宅の二階の部屋の中にいた。その自宅とは、まだ建設中の北海道の自宅である。どうやらすでに建設が完了しており、私はバスから場所的に瞬間移動しただけではなく、時間的にも瞬間移動したことがわかった。

二階の部屋の窓の外には、目の前の学校の大きなプールと、海の両方が見える。すると、天気がみるみるうちに悪くなり、激しい風と共に雨が降り始めた。ふと気づくと、私の隣には母がいて、なぜか窓の外側に出していたカーテンのレースの様子が気になっているようだった。「この激しい風でレースが飛んで行ってしまわないといいんだけど」と母はつぶやいた。

激しい雨風と呼応するかのように、海の波も高くなり、次第にプールの中に波が押し寄せてきた。私は、窓辺から一歩も動くことをせず、ただ外の様子を眺めていた。しばらくすると、雨風は収まり、晴れがやってきた。プールを見ると、プールの水は海の波が引くのに合わせて水がなくなっていた。その代わりにプールには、大量の貝の山ができていた。それを眺め、もう一度海の方を見たときに夢の場面が変わった。フローニンゲン：2019/1/21（月）07:45

No.1594: Vitality on a Dark Night

I'll go to bed after reading a book about harmony. Vitality for tomorrow already springs out from the inside of myself. Groningen, 21:16, Monday, 1/21/2019

3710. 水と色、ヨーロッパのある国に関する夢

外気がマイナス4度だと、室内もさすがに寒く感じる。先ほど、ヒーターの温度を少しばかり高くした。昨日も気づいていたが、日没の時間が五時半あたりにまで伸びていた。また、現在の時刻は八時となり、この時間帯にすでに空の色が変わり始めていることも大きな変化である。確かに外は極寒だが、太陽の動きだけを見れば、季節はゆっくりと春に向かっているようだ。

今朝方の夢の続きについてもう少し振り返っておきたい。夢の中で私は、日本のどこか田舎の学校にいた。それは小学校か、あるいは幼稚園のように思えた。いずれにせよ、校舎の中は綺麗であり、それでいてかなり広かった。私はある教室の中にいて、そこで女性教師が行っている授業を後ろで眺めていた。

教室には小さな子供たちがいて、熱心に先生の話を聞いている。話のテーマは、水と色の関係についてであり、どうやらその関係を、西洋の観点から取り上げるというのが、その日のテーマのようだった。

一人の女の子が、教室の脇に置いてあった、水の入ったコップを持ってきた。遠くからでもわかったが、水の中に一枚の葉っぱか何かが浮かんでおり、それに光が反射して、水の上層部が鮮やかな色に変化していた。他の子供たちは、それを好奇心と驚きの混じった目で眺めていた。そこで夢の場面が変わり、私は大学のレクチャールームにいた。

レクチャールームはかなり広く、そこにいたのは日本人の学生ばかりであったから、その大学は日本のどこかにあるのだろうと思われた。教室の前方に、一人の若い男性教授が立っており、授業を始めた。どうやら、今日は初回のクラスであり、この講座の概要に関するガイダンスを行うことがメインになっていた。そのため、私はかなり退屈な印象を受けた。

すると、私の近くにいた、小中高時代の女性の友人（YY）が挙手をし、「今から動画を流していいですか？」と、突然教授に訪ねた。教授はそれに承諾をした。どうやら彼女は、教授からの依頼を受けて、授業に使うための動画を撮影していたようだった。動画が始まると、そこには「299ドル」と表示された。推測するに、それは今回動画を作成するためにかかった費用のようであり、彼女は教授にその費用申請を行いたかったらしい。

友人の女性(YY):「先生、今回、25,000円ほど経費がかかりました」

私:「299ドルが25,000円？為替差損？」

教授の反応を待つよりも先に私がそのように述べると、その場にいた他の学生たちは金融の知識を持っていたようであり、私の発言に対して大きく笑った。

友人の女性:「うん、為替差損(笑)」

教授:「30,000円でいいから、後で申請しなさい(笑)」

そのようなやり取りがあった後に、動画が本格的に始まった。彼女はその動画を通じて、画面に映し出されている国がどこかを答えるように私たちに問いかけてきた。まず最初の場面は、リゾート地のようであった。海岸線を走る果てしない道路が、上空から映されており、それを見ると、どこか中南米の国ように思えた。しかし彼女は、ここはヨーロッパのどこかの国だと言う。誰もまだその国がどこかを分かっていないようだ。

動画の次の場面は、工場地帯を映しており、日本の大手製造企業の工場が映し出されていた。私は、工場の壁やフェンスにある標識の言葉からどこの国かを特定しようとしていた。しかし、そうした標識は一切なく、言葉からその国を特定することは不可能であった。しかし私は、あるところで突如として、その国がキプロス共和国かクロアチアだと思った。最終的には、クロアチアだと判断し、それを彼女に伝えた。それは正解だった。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/21(月)08:19

No.1595: A Ninja in the Wintry Morning

If a ninja existed outside right now, it would do a comical dance. The outside is severely cold to make the ninja do so. Groningen, 09:29, Tuesday, 1/22/2019

3711. イギリス人の大学生と話す夢

時刻は八時半を迎え、辺りはすっかり明るくなった。空の色がなんとも言えない美しさを持っており、淡いブルーとピンクに彩られている。赤レンガの家々の屋根には、雪がうっすらと積もっており、目の前の空き地の地面もうっすらと白くなっている。道行く人たちの様子を眺めていると、今日は本当に寒そうだ。

そういえば、今朝方は、先ほど書き留めていた以外にも夢を見ていたことを思い出した。最後に見ていた夢の舞台はイギリスだった。

私は、ある小綺麗な列車の中にいて、入り口付近に立ったまま、窓を通じて外の景色を眺めていた。列車がオックスフォードの街の駅に到着する少し前に、私の横にいた、大学生ぐらいの若く、小さな女性が私に声をかけてきた。なぜだか、私の近くには、中学校時代に技術・家庭を担当していた先生がいて、私に英語で何かを述べた。その言葉に対して、横にいたイギリス人の大学生の女性は一瞬驚いていたが、私が「その名前は可愛らしいですね」と先生に述べると、彼女はプッと笑った。

正直なところ、先生が私に何と述べたのか正確には聞き取れず、雰囲気として、私にニックネームを英語で付けてくれたように感じていた。すると、列車が目的の駅に到着し、私は列車を降りた。偶然にも、その大学生の女性も同じ駅で降り、私たちは引き続き会話をしていた。

大学生の女性:「さっきの「その名前は可愛らしいですね」っていう返答は面白かったわ」

私:「あぁ、あれね。実は、先生がなんて言ったか聞き取れず、適当に答えただけなんだよ。確かに、響きが可愛らしかったことは確かだけど」

大学生の女性:「そうね。でも、あれは「なまずのなんちゃら」っていう意味よ(笑)」

私:「そうだったのかぁ〜!」

そのようなやり取りを彼女とした後に、なぜだか私は、彼女は日本語を話せるのではないかと思った。実験として、日本語で話しかけてみると、ちゃんとした日本語で返答してきて驚いた。

私:「どこで日本語を習ったの？もしかして日本に留学したことがあるとか？」

大学生の女性:「いや、学校で一年間習っただけよ。実際には数週間ほど日本に滞在したことがあるけど」

私:「学校で一年間習っただけで、そこまで日本語を話せるのは立派だよ」

そのように私が述べると、彼女は少し照れ笑いを浮かべながらお礼を述べた。そこで夢から覚めた。

今朝方見ていたどの夢も興味深く、今後ゆっくりと、夢の中のシンボルが持つ意味を紐解いていこうと思う。今日はこれから、早朝の作曲実践をし、その後に、過去の日記を少し編集し、ウィルバーの書籍の監訳の仕事に取り掛かる。今日は、注記のレビューを行う予定である。計画としては、今日中に注記のレビューを終え、明日に、自分が執筆した「はじめに」と巻末の解説の文章を読み返していく。確かに寒さは厳しが、今日も充実した一日になるだろうと確信している。フローニンゲン:2019/1/21(月)08:42

No.1596: Sounds on a Winter Night

A fine snow is falling outside. I want to listen carefully to the sound. Groningen, 17:44, Tuesday, 1/22/2019

3712. 課題創出のための実践:芸術鑑賞の観点

時刻は午後の七時半を過ぎた。つい先ほど、本日の夕食を摂り終えた。

昨日に引き続き、今日も良い天気であった。今日の夕方に夕日を眺めていると、昨日の優雅な夕暮れが思い出された。それほどまでに、昨日の夕日は素晴らしかった。二日連続でこうした夕日を眺めることができ、とても幸福な感覚に包まれている。

いよいよ寒さが厳しくなり、室内にいてもその寒さが伝わってくるようになった。窓の外を眺めると、枯れ木たちが寒さを物ともせずに凛として佇んでいる姿が目に入った。彼らの勇姿から、いろいろと

受け取るものがある。先ほど夕食を摂りながらふと、日々の作曲実践や読書という行為は、何か課題を解決するために行っているというよりも、新たな課題を創出するために行っていることに気づかされた。これと似たような気づきは以前にも浮かんでおり、その際にもそれを書き留めていたように思う。

今日もすでに二回ほど作曲実践を行ったのだが、そこでは、事前に試してみたいことを試すことをまず行っていた。それはある意味、既存の課題を解決するために行った実践だと言えるだろう。しかし、いつも作曲実践をしていて興味深く思うのは、実践をすると、必ず次の課題が見つかることである。

「課題を発見する」というよりもむしろ、「課題を創出している」と述べることができるかもしれない。実践は課題を解決するためにあるのではなく、より本質的には、新たな課題を生み出すためにあるのだと知る。そこに、発達の原理である課題の自己組織化現象を見て取ることができる。言い換えれば、既存の課題は新たな課題を生み出し、そのことによって既存の課題は解決されていくのである。

これは読書においても当てはまることだろう。読書においては、確かに事前に課題意識を持って読み始め──課題意識が事前にないものは読書とは言えない──、その課題を解決するために文章を読み進めていくが、読書の醍醐味は課題の解決ではなく、ここでもやはり課題の創出にあるのだと思う。

読書においても、新たな観点を獲得したり、既存の課題を解決したりすることに加えて、課題を創出していくという点が本質にあるようだ。真に私たちを深めてくれる読書とは、まさにそうした絶え間ない課題の創出をもたらしてくれるものなのだと思う。

今日はその他にも雑多なことを考えていた。その一つとして、芸術家の発達段階と、その芸術家が表現しようとしている世界観の段階を混同しないように注意するというテーマがあった。

私は普段から、様々な芸術家の音楽作品や絵画作品に触れているが、その際に、様々な発達領域を考慮しながら、彼ら自身の発達段階と、彼らが生み出した芸術作品が体現している世界観の発達段階を考えてみることがよくある。時に、ハッとさせられるような、極めて高次元の世界観が作

© YOHEI KATO 2019

品に体現されていることがあるが、その際に、それをもってそうした作品を生み出した芸術家自身の発達段階が高度なものだと錯覚しないようにしなければならない、と改めて考えていた。

端的には、仮に芸術家の主体としての自己がそれほど発達していなくても、高次元のリアリティを映し出している、客体としての芸術作品を作ることもできるのである。主体と客体の混同をしないようにすることの大切さを改めて思い、この観点は是非とも今後の芸術鑑賞の際に意識しておきたいと思う。フローニンゲン：2019/1/21（月）20:00

3713. 芸術作品としてのオーダースーツ

昨日の夕日が極めて美しかったせいか、今もまた、その光景を思い出していた。オーロラのような赤紫色の夕焼けがそこに広がっていた。そして、一筋の飛行機雲がどこまでも伸びていく姿を眺めていた。昨日は、五時半でもまだかすかに明るいことを驚き、随分と日が長くなったなと思っていた。今日は、それほど空を眺める機会がなく、それほどまでに自分の仕事に集中をしていたと言える。強いてあげるとするならば、夕方に作曲実践をしている最中に、何度か空を眺めていたぐらいだろうか。

今日は計画通り、監訳書の翻訳の再レビューを終えた。注記を含めると、合計で26万字ほどあったため、レビューをすることは確かに骨の折れる仕事だったが、それ以上に実りがあるように思えた。いかなる書物も、再読によって新たな発見を得ることがあると思う。それと同じことが、ウィルバーの書籍に対しても当てはまる。

ウィルバーの理論に対しては長らく親しんできていたが、そうであったとしても、ウィルバーの書籍からはいつも新たなことに気づかせてもらっている。今日もそうした体験が、レビュー中にあった。

明日は、以前自分が執筆した「はじめに」と巻末の解説文を読み直し、適宜追加修正を施して、レビュー済みの原稿と合わせて編集者の方に送ろうと思う。レビューの提出期限よりも一週間ほど早く送ることができて嬉しく思う。

今日はこれから本日最後の作曲実践に取り組み、その後、ハーモニーに関する書籍を少しばかり読み進めていこうと思う。ここ最近は、読書にほとんど時間を充てておらず、協働プロジェクト関係の仕事や監訳の仕事、過去の日記の編集と新たな日記の執筆、そして作曲実践に時間を充てている。

これまでは知識を獲得することに焦点を当てていたため、今このようにして知識を活用する事柄に多くの時間を充てることができているのは望ましいことだろう。こうしたことにも周期性があることを知っており、おそらく私は再び、どこかのタイミングで知識の獲得に集中する時期を迎えるだろうと思われる。それがいつなのかという具体的なタイミングは全くわからないが、近々それがやってくることだけは分かっている。

明日は久しぶりに、かかりつけの美容師のメルヴィンと話をすることができる。昨夜の日記に書き留めていたように、ここからは、意識的にスーツを普段着として着ていこうと思う。

作曲実践において、良い響きを持つ音を探していくための実験をするのと同じように、スーツを普段着として着る実験をしていく必要がある。この点においても感性の鍛錬が必要であり、あれこれと自分なりの仮説を持って、スーツをいかように普段着として着崩していくかを模索していく。原則として、インナーや靴をビジネス用のものにしないということを守り、あとは色の組み合わせなどを、着るスーツによって変えていく実験をしていく必要がある。それはさながら、和音を作る実験のようであり、あるいは、一つの調の中で七つの教会旋法をどのように適用するのかという問題とも似ている。そのようなことを考えていると、外出することが幾分楽しみになってきた。かといって、スーツを普段着として外出するのは、今のところひと月に一回あるかないかなのだが。

つい先ほど、明日からスーツを普段着として着ていく際の候補を選んでいた。10着のうち、後半に作った何着かは、「企業人が着ないであろうデザイン」を主題として、店の担当の方と一緒に仕立てていったものである──かといって、それは過度に派手なものではもちろんなく、常に品を大切にして作った。最初に作った3着は、企業人であっても着れるようなものなのだが、その時はベストを作り忘れてしまった。ワイシャツ姿でウロウロすることは、下着姿でウロウロすることと同義だということを知ってから──今の時代はそういう発想も持たれないのだろうが──、日本でスーツを着る時は、ベストと合わせて作った残りの7着のうちのどれかを着るようにしていた。

© YOHEI KATO 2019

今後も、日本で仕事上スーツを着る際には、必ずベストを着用しようと思っているので、そうなってくると、普段着で着れるスーツは、ベストのない3着が有力候補である。先ほど、それら3着をクローゼットから引き出し、改めて眺めてみた。

やはり、オーダースーツもまた、一つの芸術作品なのだと思う。自分の名前が刺繍されているというだけではなく、ボタンのデザインや色、生地を含めて、その他もろもろの要素を自分で決めていったこともあり、目の前にあるスーツは、この世界で1着しか存在していないものなのだと改めて思った。それはさながら、絵画における原画のような貴重な存在に思えた。そう考えてみると、手持ちのスーツに対してますます愛着が湧いてきた。明日はぜひ、それら3着のうちの1着を着て外出したいと思う。フローニンゲン：2019/1/21（月）20:30

3714. 4台の車が炎上する夢： 友人を更生させる夢

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を始めた。先週から寒さが厳しくなった。今朝も極めて寒く、外気はマイナス3度とのことである。昨日のこの時間帯はマイナス4度であり、明日はマイナス6度とのことである。そうした寒さをむしろ励みにして、今日も一日の活動に取り組んでいこうと思う。

まずは、今朝方の夢について振り返っておきたい。いくつか断片的な場面を持った夢が続いていた。夢の中で私は、日本の大都市のオフィス街を車で走っていた。運転しているのは私である。辺りをよくよく眺めると、オフィス街とは思えないほどに閑散としている。そうした中を、私はどこに行くのか定かではないままに車を走らせていた。

すると突然、自分の眼の前で、2台のトラックが激突し、激しく炎上した。私の車は炎に襲われそうになったが、なんとかその場で速度を緩め、バックをして後ろに下がろうと思った。2台のトラックの衝突はかなり驚く出来事であったが、それに驚くよりも先に、まずは自分の身の安全を確保するために、私は後ろに下がる必要があった。すると、なんと後ろでも、2台の乗用車が激突し、2台の車が炎上し始めた。私は二つの炎に挟まれる形となってしまったが、幸いにも脇道を発見し、そこに向かおうとしたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は小中高時代を過ごした町にいた。どうやら私は小学生ぐらいの大きさだった。

田んぼの見えるのどかな田舎道を歩いていると、誰かが私の後をつけているように思った。振り返ると、そこには二人の子供の影があった。一つは男の子の影であり、もう一つは女の子の影である。私が走り出すと、男の子の影を先頭にして、二つの影が私の後を追いかけてくる。それがとても気持ち悪く、私は走る速度を上げてみたのだが、どれだけ早く走っても、二人の影は私の後をつけてくる。

「これではらちがあかない」と思った私はその場で立ち止まり、二人の影と対峙することにした。少しばかり激しい口調で、「なんで後をつけてくるんだ？」と尋ねた。すると、二人の影は少し戸惑った様子を見せており、私の質問に答えることなく、どこかに消えていった。影が消えると、私の眼の前には親友の一人が立っていた。彼には窃盗壁があり、それを治す方法について私たちは話すことにした。彼は今、更生をする時期に差し掛かっているということを私は感じていた。いくつか私の方で提案をすると、彼は口を開いて一言述べた。

親友:「それじゃあ、お互いに監視し合うことにしよう」

私:「監視ではなく、お互いに見守り合っていくことにしよう」

私がそのように述べると、彼は笑顔でうなづき、そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/22(火)06:53

No.1597: ∞ & ∞ (Double Infinity)

It has still snowed. If it continues, I will be able to see a winter wonderland tomorrow. Groningen, 21:19, Tuesday, 1/22/2019

3715. 近づく書籍の出版日:ある女性歌手と話をする夢

いよいよ、解説・監修を担当した『リーダーシップ出会う瞬間』が三日後に発売される。気がつくと、いつの間にか発売日が迫っていたというような感じである。

今回は三冊目の書籍ということもあり、以前に比べて、発売前に慌ただしくなるようなことはない。とても落ち着いた自分がいるようだ。

昨日は、現在監訳中の書籍の原稿のレビューが無事に完了し、今日は自分が担当した執筆部分のレビューをしていく。二週間弱文章を寝かせたこともあり、いろいろと追加・修正を施していくことになるだろう。そのレビューが無事に終われば、午後にでも、二つの原稿を編集者の方に送りたいと思う。こちらの書籍に関しては、出版は今年の六月を予定しているとのことであるが、これからの作業次第では、もう少し出版が早まる可能性もあるのではないかと期待している。

こちらの書籍に関しては、一人で読み解くことが難しい箇所もあるだろうから、二年振りにオンラインゼミナールを開講したいと考えている。その時の他の仕事の状況によってどうなるかはわからないが、今のところ、是非本書を取り扱ったオンラインゼミナールを開講したいと思う。

今朝方の夢の続きについてもう少し振り返っておきたい。夢の中で私は、ある日本人の有名女性歌手と話をしていた。一つ前の夢の中で現れた親友が窃盗壁を持っていたのと同様に、その歌手も、心の病からもたらされる問題行動に悩んでいるようだった。私はその歌手の話を、旅館の一室で聞いていた。

そこには畳が敷かれており、私たちは畳の上に腰掛けて話をしていた。その歌手の方と話を続けていくと、徐々に彼女は心を開いてくれ、過去の色々なことを私に話してくれた。ある時、消え入るようなとても小さな声で、「実は私・・・八日間ほど刑務所に入っていたことがあるんです」と彼女が打ち明けた。どのような理由で刑務所に入ったのかを私はあえて聞くことをせず、引き続き、彼女の話に耳を傾けていた。

すると突然、彼女が畳の上に倒れ込み、苦しそうに右の胸辺りを押さえ始めた。どうやら、彼女の問題行動の根源にある心の病に関するエネルギーが、右の胸に集まっているようだった。「集まっている」というよりも、何かしらのエネルギーがそこに「滞っている」と表現した方が正確かもしれない。激しく苦しんでいる彼女に対し、私は呼吸と共にそのエネルギーを外に吐き出していくように述べた。彼女は右胸をさすりながら、呼吸と共に少しずつその滞ったエネルギーを外に吐き出して行った。しばらくそれを続けていると、彼女は徐々に落ち着きを取り戻した。それを見て私は安堵した。

彼女が完全に落ち着きを取り戻した後、歌手として腹筋を鍛えることが大事だという話を私にしてくれた。何のためらいもなく、彼女は自分の腹筋を披露してくれた。見ると、女性アスリートのような割れた腹筋をしていた。しかし、私も同様の腹筋を持っていることを伝え、自分の腹筋を彼女に見せた。すると、彼女は驚いた表情を見せ、どのようにトレーニングをしているのかを私に尋ねてきた。私は畳の上に伏せ、いつも行っている腕立て伏せの方法を彼女に教えた。すると、そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2019/1/22（火）07:14

No.1598: A Quiet Winter Wonderland

As I imagined last night, a winter wonderland showed up when I got up this morning. It exists very quietly. Groningen, 08:13, Wednesday, 1/23/2019

3716. ジャズ音楽への関心と今朝方の最後の夢

時刻は午前七時を迎えた。ここ最近は、日の出の時間が早くなったため、あと一時間ほどすれば日の出を拝むことができるだろう。

今、食卓の窓から満月が見える。書斎の机から見て、右斜め上空に浮かぶ、淡い光を発する美しい満月を眺めている。こうした月の光も、実際は太陽の光の反射であることを考えると、まだ太陽は見えないのに、月の光を通じて太陽の存在を想起できていることが面白い。早く太陽の姿を見たいという早る気持ちを抑えながら、ゆっくりと本日の活動に入っていきたい。

昨夜は、少しばかり教会旋法に関する書籍を読んでいた。厳密には、音楽理論の書籍を紐解き、その中の教会旋法に関する箇所を読んでいた。すると、先日私が教会旋法を活用して作ったと思っていた曲は、正しく教会旋法を活用できていたわけではなかったことに気づいた。実際のところは、かなり間違った使い方をしており、結局それは教会旋法を活用したというよりも、あまり見かけないコード進行を適用しただけにすぎないことがわかった。

今日は、改めてその書籍に記載されている事柄を読み、その後、教会旋法を活用した作曲実践をしたいと思う。昨日の日記に書き留めたように、課題意識を明確にしてから読書をすることほど多くのことが得られることはない。

教会旋法を活用してメロディーを作る際には、できるだけ避けるべき音──ないしは前後の工夫を凝らして活用する音──があるため、それがどの音かを、手持ちの音楽理論のテキストに書き込んでおきたいと思う。そうすれば、今後どのような調で教会旋法を活用する際にも、その箇所を参照すれば良いことになる。

今はクラシック音楽の理論を学んでいるが、いずれはジャズ音楽の理論についても学んでいきたいと思っている。ラヴェルやガーシュウィンもジャズの要素を積極的に取り入れて作曲を行っていた。ジャズの理論を学ぶことによって、自分の作曲の幅が広がるだろう。近々、街の楽譜専門店に足を運んだ際には、ジャズピアノに関する楽譜を何か購入してみようと思う。

もちろん、今はクラシック音楽の理論を学ぶことが先決だが、近い将来にジャズ音楽も学ぶことも視野に入れて、今のうちから少しずつ、研究材料としてジャズピアノに関する楽譜を購入していこうと思う。そのようなことを考えていると、今朝方の夢の続きについて思い出した。夢の中で私は、日本の旅館街にいた。

どうやら私は海外からその地に訪れているようであったが、フライトの疲れなどは一切なく、むしろこれから日本に滞在することを楽しみにしているようであった。私は、背景に雪の積もった山を眺められる旅館に宿泊することになっていた。どうやら私は以前ここを訪れたことがあるらしい。というのも、隣にいた知人の方に、過去に宿泊していなければわからないであろう旅館の仕組みについて色々と解説をしていたからである。

その旅館は複数の棟を持っており、各棟が一階の通路で繋がっている仕組みになっていた。そのため、食堂がある場所へ行く際に、いちいち棟の外に出る必要がなく、仮に雨が降っていても濡れることなく、一階の通路を通っていくことができる。そのような説明を隣にいた知人の方にしていた。

旅館の受付に到着し、そこでチェックインを済ませた私たちは、早速食堂に行き、そこで昼食を摂ることにした。見るとそこには、すでに多くの人が集まっており、皆和気藹々と昼食を食べていた。中には、私と同じように、海外からこの旅館に来た人もいるようで、フライトの疲れからか、食堂でご飯を食べた後にテーブルの上で寝ている人の姿をちらほら見かけた。

© YOHEI KATO 2019

席を確保し、いざ料理を取りに行こうとすると、近くのテーブルの上に置かれていた大量の寿司が目に止まった。どうやらそれは、本格的な料理を注文するほどお腹の空いていない人が、話をしながらつまむために置かれているようだった。寿司が並べられた器に、そのようなことを示す札が立てかけられていた。その札の文言を改めて読んだ時、夢から覚めた。

ふと顔を上げると、先ほどまで見えていた月がもう見えなくなっていた。月が動いている。地球も動いている。しかもそれは、私が気がつかないほどゆっくりと着実に。フローニンゲン:2019/1/22(火)07:49

No.1599: A Flicker of Smoke of a Chimney

I can see smoke arose from a chimney that is flickering. Groningen, 11:29, Wednesday, 1/23/2019

3717. さざ波のような粉雪舞う中で

時刻は午後三時半を迎えた。つい先ほど、街の中心部から自宅に戻ってきた。先ほどまで、かかりつけの美容師のメルヴィンの店にいた。今日はすこぶる寒く、ちょうど店を後にする直前に粉雪が舞い始めた。そして今は、さざ波のように吹雪いている。帰り際、粉雪が風に舞う姿を眺めることができ、それは大変美しかった。白い雪の波が通りを走る姿は、この季節にしか見られない自然の美だと思った。

欧州での生活を始めて以降、以前にも増して、自分がますます自然神秘主義的になっていくのを感じている。これもまた、発達プロセスの一現象なのだろう。

赤レンガの家々の屋根に、白い粉雪がうっすらと積もっていく。白と赤のコントラストもまた美しい。

帰り際に近くの池の前を通った時、それが凍っており、池の表面が雪で覆われている姿を見た。そろそろ、オランダの名物である、河川敷のアイススケートを眺めることができるかもしれない。

今日もまた、メルヴィンとの会話から様々な洞察と気づきを与えてもらった。メルヴィンの店は、街の中心部の教会の裏手にあり、以前の日記で言及したように、その辺りはモダンな店が並んでいるの

と同時に、歴史的な教会もあるため、俗なものと聖なるものが見事に調和しているような雰囲気がある。そして、メルヴィンの店は大きな教会の真後ろにあることもあり、聖域の中にあるような印象を受ける。

店に到着すると、メルヴィンがいつものように温かく迎えてくれた。特製のコーヒー豆で作られたエスプレッソを一杯もらった。メルヴィンの店は本当にくつろげる空間であり、今日は店に新しく、テーブル・サッカーゲームが置かれていた。それは以前に国際大会で使われていたヴィンテージものらしく、50年前に製造されたらしい。エスプレッソを飲みながら、テーブル・サッカーゲームの話を含め、様々な雑談をしていた。

オーストリア旅行の話を聞く前に、ここ最近のフローニンゲンは寒くなったと私が述べると、「オーストリアにいた時に、マイナス17度を経験しているから、フローニンゲンは随分と暖かく感じる」と、メルヴィンは笑いながら述べていた。今年の三月に日本に旅行する計画についてメルヴィンに尋ねてみると、新しい店がオープンして間もないこともあり、今は仕事に集中し、日本への旅行は後に延ばし、年内のどこかで日本に行くことにしたそうだ。その時に言うのを忘れたが、それであれば日本の秋を満喫することを次回会った時にお勧めしようと思う。日本は桜だけではなく、紅葉も美しいことを伝えよう。

今日も改めて、メルヴィンの思想と実践に感銘を受けるものがあった。先日はなにやら、取材を受けたそうである。

メルヴィンは、既存の美容院という概念を超えて、美容院という空間をコミュニティーに開かれたものにし、そこに様々な人が集まることによって、新しいものが創出されるようなプラットフォームを生み出そうとしている。毎月のどこかの月曜日の夜は、メルヴィンが作った料理を美容院で振舞うことや、週末にはテレビゲーム大会、音楽イベントなどがメルヴィンの店で行われている。それ以外にも、メルヴィンは、政府が定める低所得者層の人々やホームレスの人々の髪を切ることを毎月どこかの週末に行っているようだ。とにかく様々な人と分け隔てなく交流し、そうした交流を通じて人生を謳歌するというメルヴィンの生き方には大変感銘を受ける。

© YOHEI KATO 2019

コーヒーを飲みながら、そして雑談しながら髪を切ってもらっていると、あっという間に一時間が経った。店を出る前に次回の予約を済ませ、次回は三月の最初の週に髪を切ってもらうことになった。メルヴィンとの次回の会話もまた楽しみだ。フローニンゲン：2019/1/22（火）16:04

No.1600: The Previous Fibonacci Series

I was composing music, applying the idea of the Fibonacci series. However, I was oblivious of the trial, and thus, the sequence became disordered in the end. I'll try it again next time. Groningen, 15:20, Wednesday, 1/23/2019

3718. 小さな積み重ね・小さな発達

時刻は午後の七時半を迎えた。午後から降り始めた粉雪が、今もまだ降っている姿が見える。粉雪の舞を眺めていると、自然と心が落ち着いていく。街頭に照らされた粉雪が、ゆっくりと地上に降り注ぎ、それは着実に地面に積み重なっていく。日々少しずつ積み重ねていくことの大切さを、粉雪の堆積から学ぶことができる。

夕食後、ここ最近ずっと聴いていたバッハのピアノ曲から、サティのピアノ曲に変えた。サティの曲を聴きながら、なおかつ粉雪が奏でる静かな音にゆっくりと耳を傾けたい気持ちだ。

今日は午後に、かかりつけの美容師であるメルヴィンの店に足を運んだ。その際に、メルヴィンは開口一番、「今日の格好はお洒落だね！」と述べた。

今日は早速、スーツを普段着として着てみるという実験をしてみた。メルヴィンの反応を見る限り、その実験は成功に終わったように思う。ただし、本日着ていたオーダースーツは、企業社会でも違和感なく着れるようなものであったから、幾分硬さがあったように思える。スーツを着崩す際の原理である、インナーと靴をカジュアルなものに変えることを心がけたが、果たしてどれほどそれが効果があったのかよくわからない。

鞄に関しては、スーツの色とリュックサックの色が同色であったこともあり、さすがにリュックを背負うことはやめた。スーツを着ないまま、クローゼットに仕舞っておくのはやはりもったいないため、今後も積極的にスーツを着ていこうと思う。

今、少しばかりメルヴィンとの会話を改めて思い出している。そういえば、人間発達について少しばかり話をしていた時、メルヴィンが、「二年前の自分とは別人の自分がここにいる」ということを述べていた。これはまさに発達の要諦である。また、前回髪を切ってもらった時から今日にかけて、お互いの人生で少なからぬ変化があることをメルヴィンが指摘しており、それもまた小さな発達現象だと述べることができるだろう。例えば、前回髪を切ってもらってから、解説・監修を務めた書籍が完成に向かったことは、書籍という一つの作品の発達に他ならなかった。

また、解説・監訳を務めている書籍のレビューが終わったことも同様である。その他にも、日々の日記の執筆そのもの、そして生み出される曲の全てが、小さな発達現象を内に抱えており、また、それらは小さな発達現象に他ならないと言うことができる。このように、目を凝らして私たちの日々をよくよく見てみると、そこに無数の小さな発達を見つけることができるのだ。

粉雪から吹雪に変わり始めた。現在の気温はマイナス2度であり、明日はマイナス7度まで気温が下がるそうだ。今夜から明日の午前九時まで雪が降り続けるようであるから、明日の起床時には、一面が白銀世界になっているだろう。フローニンゲン：2019/1/22（火）19:59

3719. 白銀世界の朝に見た夢

今朝は五時過ぎに起床し、五時半を回ったところで一日の活動を始めた。起床してみると、昨夜に予想していた通り、外は白銀世界と化していた。真っ白に積もった雪を眺めながら、今この日記を書いている。今日の最高気温は0度、最低気温はマイナス8度であり、明日は最高気温ですらもマイナス2度となるそうだ。本当に本格的な冬がフローニンゲンにやってきた。

雪景色を眺めながら、今朝方の夢について振り返っている。今日もいくつかの夢を見ていた。夢の中で私は、前職時代にお世話になっていた上司と話をしていた。その方は、ロンドン事務所に在籍していたこともあり、その時は国際電話を通じて、イギリスのサッカーについて時折話をしていたのを覚えている。

夢の中において、その方が私を含め、若手の社員たちに対してクイズの問題を何問か出題した。なにやら、それらのクイズに正解して、希望があれば、その方が準備した特別な食事を食べれるとのことであった。私はすべてのクイズに正解したのだが、あえてその方の申し出を断り、特別な食事を

食べないことにした。オフィスから離れようとすると、オフィス内の屋根裏部屋のような場所で、今から食事会がなされるようであった。結局、それに参加したのは若い三人の男性たちであった。帰る際にその屋根裏部屋の前を通る必要があり、部屋を一瞥すると、世界の様々な豪華な料理がテーブルの上に置かれていた。その光景を見た瞬間に、一瞬美味しそうだと思ったところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、大学時代のサークルの友人と共に、ある調べ物をしていた。それは、学内のあるフットサルサークルが存続の危機に陥っているようであり、うちのサークルと統合する話を持ちかけるための調べ物だった。

友人はうちのサークルの代表を務めており、統合には比較的乗り気であり、私もその案に賛成だった。二人は、各々のパソコンを用いて、危機に瀕しているそのサークルについて、より情報を集めようとしていた。だが、私は自分が通っている大学の名前をひらがなで検索画面に打ち込むことがなかなかできないでいた。何度やっても、ひらがなを少し間違えてしまう。そのようなことが続いていると、友人が先にそのサークルについての情報を発見したようだった。そのため、私は自分で調べることをやめ、友人のパソコンの方に近づいていった。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面においては、小中高時代の友人と、前職時代にお世話になっていた女性の上司の方が柔道の話をしていた。私は二人の近くでその話を聞いており、時々話に入った。見ると、二人は共に浴衣を着ていた。女性の元上司の方は運動神経が極めて良く、なにやら柔道も強いとのことであった。二人はおもむろに立ち上がり、これから柔道の試合に参加すると私に告げた。二人は浴衣を着たまま、その場を去っていった。

その場に一人残された私は、ハッとした。どうやら今自分がいる場所は、日本料理屋であることに気づいたのである。私は店内がどのような作りになっているのかに興味があったため、その場を離れて、少し店内をウロウロしてみた。すると、それぞれの席は半個室のようになっており、木の柵のようなものを通じて、個室の中の人の様子を伺うことができた。

店内を時計回りに歩いていると、それぞれの個室の中には、たいてい一人の女性が座っていて、食事をするのではなく、テーブルにテキストを広げて勉強をしていた。私は柵越しに、それぞれの

人が何を勉強しているのかを確認していた。彼女たちは主に、会計学、厳密に言えば管理会計を勉強しているようだった。彼女たちは全員日本人であったから、日本語のテキストを用いていることは全く不自然ではないのだが、私は日本語で書かれたテキストを近くで見たいと思った。

そのようなことを思いながら、引き続き柵越しに個室の中を確認して歩いていると、誰もいない個室を見つけた。ただし、そこにはテーブルの上に広げられた三冊のテキストがあった。一冊は管理会計論、もう一冊は財務会計論、最後の一冊は租税法か企業法を扱っているようだった。私はそれらのテキストを手にとって読みたいという衝動に駆られたが、誰もいないその部屋に勝手に入るのもまずいだろうと思って、しばらく部屋の前で考え事をしていた。

すると、今私が歩いてきた道を辿るかのように、一人の女性がこちらに近づいてくるのが見えた。その女性は、高校時代の友人の一人であることがわかり、私は彼女に、管理会計のテキストを読ませてもらえるようにお願いをした。すると、彼女は快諾をしてくれ、私はようやく日本語で書かれたテキストに触れることができた。とても嬉しい気持ちが自分の内側から湧いてくるのと同時に、なぜだか私は、「この人生を創造活動に捧げよう」というようなことを突如思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2019/1/23（水）06:19

No.1601: A Brilliant Snowscape

Although it was severely cold today, I could see a brilliant snowscape that made me forget coldness. Groningen, 20:07, Wednesday, 1/23/2019

3720. 夢の追記：日本語空間と英語空間

時刻は午前六時半に近づいている。外は本当に寒そうだ。今、一日分のコーヒーを入れ始めた。

昨日、無事に、監訳中の書籍の原稿を編集者の方に送った。翻訳のレビューと、自分が執筆を担当した箇所の文章の二つを送った。当初の予定では、本書は今年の六月に出版されるとのことであるが、ここからの作業次第ではもう少し出版時期が早まるかもしれないと期待している。もちろん、これは私の単なる期待であり、実際にどうなるかはわからない。この先に私が行うことは、ゲラを二回

確認するだけとなった。今のところ、二度のゲラの確認は、4月と5月に行う予定となっている。その頃になれば、この寒さも少し和らぎ、春を感じられていることを期待する。

先ほどまで、今朝方の夢について書き留めていたが、最後にもう少し別の夢を見ていたことを思い出した。私は、日本で実際に通っていた大学にいて、その校門の前で、何人かの学生と話をしていた。一人は、名古屋の大学で工学系の学士号を取得した女性であり、彼女は工学から分野を変えて、社会学を学びにうちの大学に来たようだった。彼女が所属するゼミナールのメンバーは、皆一様に身長が171cmとのことであった。それを示すかのように、彼女はゼミナールのメンバーの集合写真を見せてくれた。すると、確かに男女共に同じような背の高さであった。

だが、列の一番前に、ひときわ小さい男性が笑顔でポーズを取っている姿が見えた。彼女に聞くと、その男性だけは例外であり、155cmほどの身長だそうだ。そのような話をしていると、今まさに話題に上がっていた彼が校門にやってきた。そこで夢が終わった。

今朝方は、そのような夢も見ていた。いずれの夢もやはり興味深い内容であり、頭で解釈しようとしても、どうにもわからないことがある。今朝方の夢に限って言えば、自分の中の強いシャドー、例えば、攻撃性を担うシャドーは現れていなかったように思う。どの夢も、とても穏やかな質感を持っていた。

印象に残っているのは、一つ前の夢において、私が日本語に飢えているかのような様子が見て取れたことだ。

昨日、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、そこで彼と話をしている時、普段どの言語で思考をしているかについて話題となった。その前に、普段どの言語で書かれた書籍を読んでいるかが話題となっていたことを思い出す。

メルヴィンは、18歳以降、英語の書籍を読むことがめっぽう増えたそうだ。特に、著者が英語で文章を書いたのであれば、オランダ語に翻訳されたものをできるだけ読まないようにしていたそうだ。なぜなら、書籍は著者の実存性が不可避に滲み出すものであり、著者本人の実存性を感じながら書籍を読むことからは、計り知れないものが得られるからだ。私もメルヴィンの考えに同意しており、自

© YOHEI KATO 2019

分の探究領域の都合上、ほぼ必然的に英語の文章を読むことが多い。人間発達にせよ、教育哲学にせよ、音楽にせよ、基本的に手持ちの書籍のほぼ全ては英語である。

人間発達と教育哲学に関しては、一冊も和書がない。普段の思考においても、それらの領域の場合は、やはり英語でものを考えていることが多いことに気づく。これはもちろん、欧米生活を始めた最初の年に、普段の思考においてできるだけ日本語を使わないようにするということを実践してきたことが影響しているだろう。今このように執筆している日記では、とことん日本語を使うようにしているが、確かに、それ以外の時間においては英語空間の中にいるような感覚が絶えずある。そうしたことが、今朝方の夢に何かしらの影響を与えていたのではないかとふと思った。フローニンゲン：2019/1/23（水）06:19

No.1602: Tomorrow for Us

Is my tomorrow the same as others'? How similar and distinct is our tomorrow?Groningen, 21:08, Wednesday, 1/23/2019